

## 年報第3号刊行にあたって

心理科学研究センター研究代表者  
人間科学部心理学科教授

長田 洋和

平成23年度に文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として選定された研究プロジェクト『融合的心理科学の創成：心の連続性を探る』も3年目を迎えました。

今年度は文部科学省より、研究進捗状況に係る中間評価を受け、これまでの研究を見直す機会となりました。

心理諸科学の融合を目指すにあたり、基礎から臨床、あるいは基礎から応用へのアプローチについては成果が上がってきている一方で、臨床の現場や応用的な問題意識を、基礎研究へフィードバックするプロセスに若干の難があると自己評価を行いました。この点を改善するため、平成25年度より、国里愛彦研究員をプロジェクトメンバーに迎え入れました。国里研究員は臨床心理士の資格を持ち、病院などで心理臨床の実践に取り組むとともに、脳画像計測などを用いた実証研究にも取り組んでいます。国里研究員の現場に根ざした問題意識と研究能力を加えることで、臨床の現場や応用的な問題意識を基礎研究へフィードバックするプロセスを、より生産的に行えるようになると考えています。

平成25年度第1回シンポジウムは、8月31日に神田校舎において、国際シンポジウムとして開催致しました。「Development and current situations of Cognitive Behavioral Therapy for children and/or persons with disabilities -障がい児・者への認知行動療法 基礎研究から応用実践へ その発展と今-」と題して、エヴィデンス・ベースト・プラクティスとしての認知行動療法を脳損傷患者に対して積極的に行い、かつそれらの患者に対する国民の臨床像の正しい理解に貢献しているオーストラリア脳損傷協会“SYNAPSE”に後援いただき、そのCEOであるJennifer Cullen女史を招聘し、基調講演を行っていただきました。また、長田研究員、岡村研究員および国里研究員からプロジェクトで行われている研究報告も行われました。第2回シンポジウムは、11月10日に、石金研究員の立案・運営のもと「生理心理学のフロンティア」と題して、日本基礎心理学会の共催で開催されました。講演は「視覚」・「記憶」・「抗うつ作用」といった身近なテーマとなっており、本センターの研究テーマである「心の連続性を探る」にもとづき「脳と心の連続性」を最先端の科学的手法で解明し、その研究成果を社会に広く発信することを目的としました。基調講演では東京大学大学院人文社会系研究科の立花政夫教授から、心理学において盛んに研究対象とされている「視覚」の神経機序についてお話いただいた他、同領域の優れた研究者による講演および石金研究員からの研究報告が行われました。

さらに、前年度に引き続き、ヒトならびに動物を対象とした基礎研究も行われ、そのうちのい

くつかは、国際的な欧文学術論文誌や国内の伝統ある査読付き論文誌に採択されました。大久保研究員とRAの石川らは、昨年度に発表した裏切り者検知に果たす表情の役割に関する研究を発展させ、その神経機構を検討する論文をBrain and Cognitionに発表しました。PDの関口は、澤研究員の指導のもと、ヒトと動物の空間推論に関する論文を執筆し、動物心理学研究に採択されました。

初年度に行った新たな心理統計法の提案について、波及効果が平成25年度にも見られています。平成25年5月18日に行われた日本基礎心理学会第1回フォーラム「閉じられたANOVAとその先：心理統計の現状と将来を考える」において、大久保研究員と岡田研究員が登壇し、我々の行った提案の中でも、実験心理学で多く用いられる分散分析に焦点を当てました。フォーラムは大久保研究員が企画者として関わるだけでなく、専修大学社会知性開発研究センターが共催し、本プロジェクト全体が積極的に関わる形で行なわれました。このような心理統計に関する講演やシンポジウムの依頼を、日本認知心理学会や日本パーソナリティ心理学会からも受けており、それらはそれぞれの学会における平成25年度大会で開催されました。

来年度以降、心理疫学的調査をふまえ設定したモデルの検証を継続し、それを基礎的・実証的な枠組みに戻し再検討していきます。さらにその臨床現場へのフィードバックを目標とすることで、融合的な心理科学を創成する方法論的な礎となると考えます。